

刺身サンの奇妙な小噺

刺身 ウィルソン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——男刺身、誠心誠意心を込めて生きて参ります。

そんなお話。

※ご注意下さい※

このお話は作者、刺身の実体験に

少しの誇張と、若干の脚色と、たくさんの地雷要素を適当に大鍋に放り込んでグツグ
ツと煮詰めた少なくとも文章作品として成立していない別の何かになります。ご注意
ください。

目

序章

刺身サンの奇妙な小噺

次

1

序章 刺身サンの奇妙な小噺

昔々（執筆時の9／7現在から数えて凡そ数ヶ月程前）あるコンビニ務めの中間管理職の男がそれはそれはダイナミックかつアグレッシヴ（無経験のため比較対象なし）な告白をされ、超困惑＆混乱していた。

具体的には

告白してきた相手（当然ながら女性である）が

目の前で

いきなり

「お前様が好きだつたんだよ!!!（要約）」

を、した。

男は、

あまりにも突然に起こつた事態に対し、

一時的に機能不全を起こし、

「ん？（困惑）：ん？（把握）」

という情けない声を出し

「ヌ、ウ、ンツツツツツツツツ?!?!(驚愕)」

と、咆哮を上げた。

目力強そうですね。

しかし男は割と直ぐに冷静になり、その中間管理職ブレインを大回転させたのだ。
そして彼の脳内で、会議は踊った。盆踊りを彷彿させるかのように。

理性A

「情報処理プロセスが停止。駄目みたいですね（諦め）」

理性B

「おつ、待てい（江戸っ子）なんかの漫画で読んだぞ。その記憶によると返事はこの場で、
どうぞ」

理性C

「漫画は漫画で現実は現実。これもう（どうすりやいいか）わかんねえな」

本能A

「なんでえこんなの即日お持ち帰りでねえか」

本能B

「やべえよやべえよ…逃げようぜ…」

理性C

「いろいろ＼（^o^）／オワタ」

諦めの意見が多数だが、踊る踊る。その後もどんちゃん騒ぎで本体の思考が停止してゐるのじやつた。

そして体感時間数秒、脳内時間にして数日分経過した辺りで脳内会議はある一つの禁忌にたどり着く。

それは鈍感難聴系主人公の最終奥義

「え？ なんだつて？」

である。

聰明なるドクシャリヘツズならば既にお分かりだろう。

この奥義は死の危険性を持つてゐるということを。一步間違えればその先はエンマ・ザ・グレイテストキング!!サンさえ裸足で逃げ出す程のホラー・エクスペリエンスが待ち構えているのだ。

ム。そこで踏み止まらせるのは最終発言チエツクシステム＝サンこと総括理性プログラ

オイオイオイ死ぬわアイツと止めてくださいました。

代わりに、脳内を強制的に仕事モードにスイッチさせて冷静な対応を取らせたのである。ぐう有能。

そして男はついに動いた。

男

「申し訳ないが、こういう事を言われるのは生まれてこの方初めてでどうすればいいか分からぬ。考える時間をくれ」

そう、保身と保全。その二つをPERFECTにこなす最善の答え。自らモテたことすら一度もないことを明かし、思考のための時間を頂きつつ相手を傷つけない（と考えた）最前の一 手。

相手（後の彼女様）

「…解りました…とりあえず来週に仕切り直します。いきなりで驚かせてすいません」

男（＝作者を加工した存在なので今後刺身とする）

「いいのです。てかよく考えなさい、本当に私のような男で良いのかとかそのあたりを特によく考えなさい。行き当たりとか罰ゲームとかいじめられてるとかならすぐに言いいなさい」

…………斯くして、男はその場での返答ができなかつた。しかし、後々自分もその告白してきた女性の事が好きになつていて、気が付いたのである。

その後は割と早かつた。一週間後のリトライに対し誠心誠意、はつきりとYESをぶつけたのだつた。

元々、その相手の子はなぜか男に対し、社内で結婚秒読み疑惑を持たれるレベルで接觸が多かったのだ。

接触が多い理由もはつきりし、上司に説明したところ
上司

「付き合つてすらいなかつたとかお前ホモかよお（意訳）」
と言われたとか。
おわり。